

出島橋

てじまばし

九州は石橋の里、とくに各地の眼鏡橋と呼ばれるアーチ橋は、人のよく知るところである。長崎市内でも、中島川の川筋には、数多くの石造アーチが架かっている。昭和57年(1982)7月23日の大水害で手痛い被害を受けはしたが、文化財保存の熱意によって、復旧あるいは新しい石橋が架けられ、その中には国の重要文化財に指定されている眼鏡橋もある。

文明開化発祥の地長崎は、鉄の橋の出現も早かった。中島川の少し下流には、慶応4年(1868)8月、日本で初の鉄の橋(くろがね橋)が架けられたことがあり、また、錬鉄製の古い出島橋は今も健在である。

長崎は長い鎖国の間、日本唯一の窓として外に開かれていた。寛永11年(1634)幕府はポルトガル人を住まわせるために扇形の埋め立て地・出島を築いたが、ポルトガル船の来航禁止の後、寛永18年(1641)平戸のオランダ商館をこの地に移した。以来幕末に至るまで214年の間、出島はオランダを通じての貿易、文化の交流の拠点であったのである。

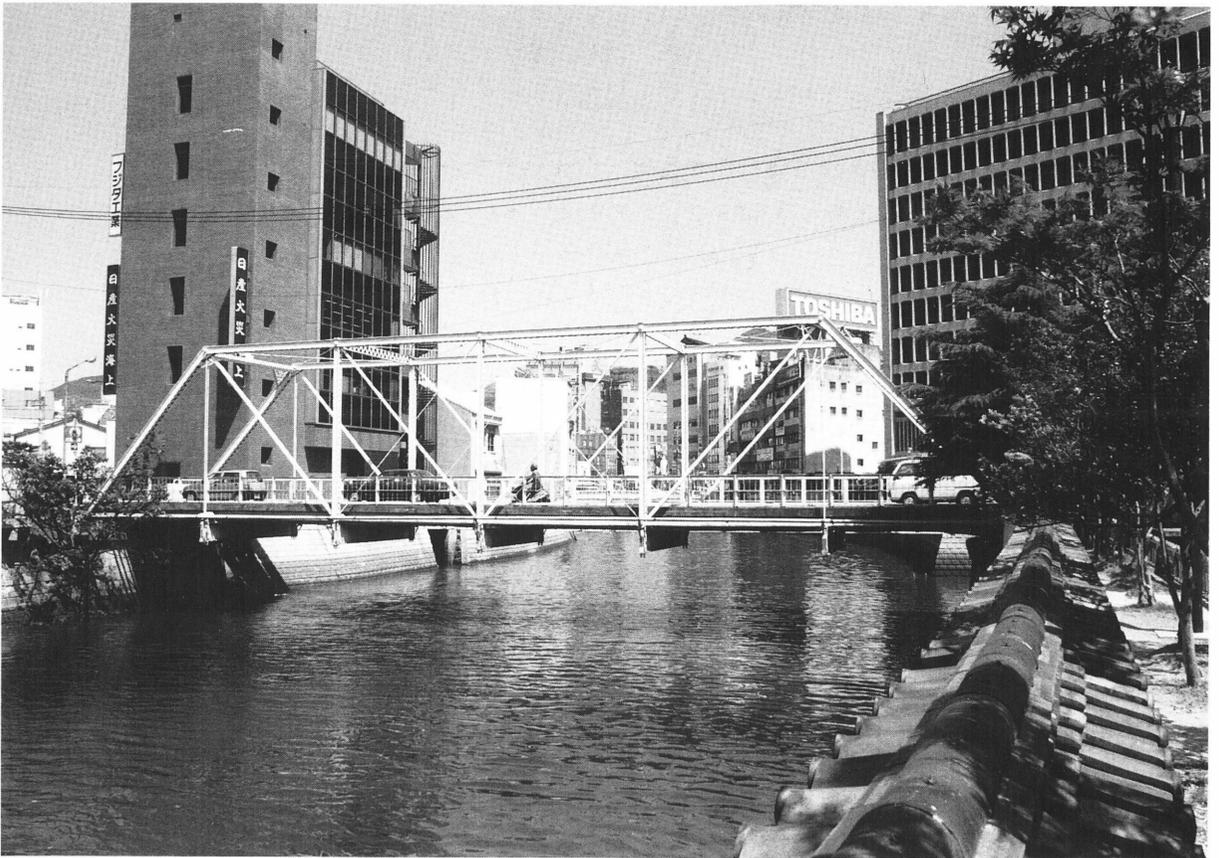
安政5年(1858)の5ヶ国修好条約で函館(当時箱館)、横浜、長崎に外国人居留地が建設されることになり、近代土木技術もそこから導入された。前記のくろがね橋もその一例である。ちなみに、横浜では外国人居留地に渡るための橋、吉田橋がくろがね橋の翌明治2年に初の鉄のトラス橋で架けられた。

明治に入ってから長崎は重要な港湾都市であり、平地が狭いために埋め立てが盛んに行われ、それにとまって新しい橋が架けられていく。その初期には木橋で、明治2年(1869)新しい埋め立て地への出島橋も木橋であった。中期になると木鉄混合のトラス橋が架けられるようになり、明治21年(1888)には出島橋も木鉄混合トラス橋に架け替えられた。しかし、明治23年の新川口橋は支間114ft(34.747m)で全錬鉄製、部材を繋ぐ格点にピンを用いたトラス橋であった。

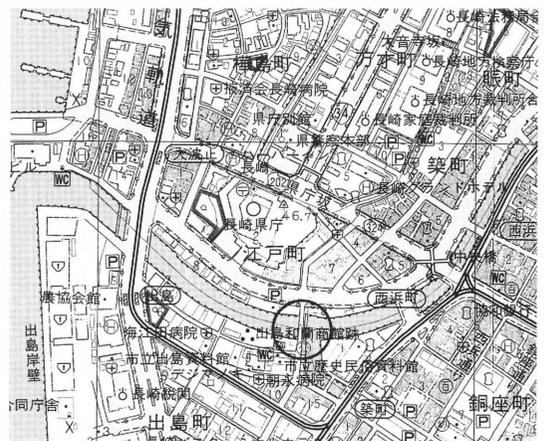
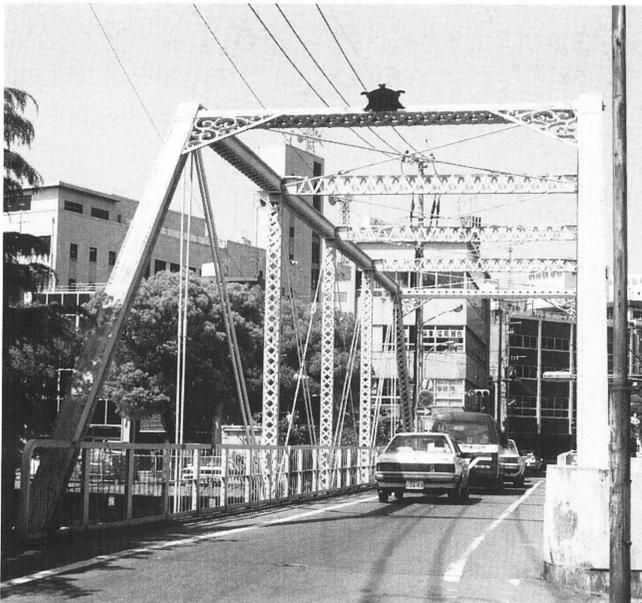
現在の出島橋は、往時の居留地出島のミニチュア、長崎資料館のある一角に、今もよく手入れされて人と車を通して。橋の正面の銘板には「明治43年架」とある。しかし、橋の構造からもっと古いものではないかと疑問をいただいた長崎大学岡林隆敏助教授らの調査によって、この橋は前述の新川口橋をその年に移設したもので、その材料はアメリカからの輸入であることが明らかとなった。

100年余を経たこの橋、近代長崎の歴史を眺めながら、何時までも健全で、社会資本として役立ち、文化発展の証しとしてあり続けてほしいものである。 [T J]

竣工年月：明治23年(1890)の新川口橋を明治43年(1910)移設
 所在地：長崎県長崎市
 河川名：中島川
 橋長・幅員：36.7m×5.48m
 径間数・支間長：1×34.747m
 形式：下路プラットトラス



〈1989年4月，撮影・共に田島二郎〉



(1:10,000 長崎)